

私の「地元学」

～知っているつもりは、今日からやめよう～

栃木県足利市 前川美帆

「地元学」の講義前から、その課題は与えられていた、下記の①②③がそれであるが、これが今後どのような意味を持ち、プログラムの中でどのような活用をされていくのだろうか…。想像をめぐらせては、ただただ課題にあるとおりに「とにかく、やる」ということだった。

①環境クイズ

事前課題の一つ目として出された「環境クイズ」。地域に対する何気ない質問が30題。これを特別に調べずに自身の今の知識で答えるのであるが、完全にわかる質問は二桁にも満たない。いかに自分の地元のことを知らなかったのか、知っているつもりになっていたのかを思い知らされる。

②地元の人へのインタビュー

事前課題の二つ目として課せられたのが、「地元の人へのインタビュー」で、地元の人最低10人（目標50人！）に対して事前に設定された質問をせよというものだ。質問の内容は、「これまで食べておいしかったものは何か？」「地元で好きな場所はどこか？」「これまで生きてきて嬉しかったことは何か？」などいずれもシンプルな内容のものが合計5問。

私はまず、ゴールデンウィークにボランティアとして携わったイベントスタッフの仲間に聴いてみることにした。するとどうだろう、場はその話題で持ち切りになり、足利談義に花が咲く結果となった。みんな、足利のことをこんなにも思ってくれているのか…。胸が熱くなった。

次に行ったところは、70代の方々が集いまちの活性化のために活躍するとある店舗だ。そこでは3名の方に話を聴くことができたが、戦時中の話になると皆昨日のことのようにはじめた。そして、「これまで生きてきた中で大事にしてきたものは？」の質問に対して、「命」だときっぱりと答えた。そして「こうしてまちの活性化のために色々できるもの、平和があるから」という言葉に、戦争を知らない私は心が震える思いがした。

何かを聞く際に相手との距離を縮めるためには、尋ねやすく答えやすい質問から入ることが大事らしい。地元の人へのインタビューはやればやるほど、発見と驚きが生まれてくる。また、友人の子供たちに依頼し、一部動向してもらったのだが、質問をした住民は、普段よりわかりやすい言葉で答えてくれ、写真に撮る顔も自然と柔らかい笑顔になってくれた。子供の力はすごい。

そのようにして集めた住民からの答えには、地元に対する思い出や愛着、それに反するもどかしさや理想と現実のギャップが現れていた。しかし、誰一人として、「地元に関心」という人はいないのだ。私たちが思っているより、住民は地域のことを良く見ている、考

えていることを気付かされた。

③一代記

私は、自宅からさほど離れていない場所に住む80代の女性の話を聴くことにした。一代記作成のお願いに行くと「私なんかでいいの?」と恥ずかしそうにおっしゃっていたが、2日間に渡り自宅に通い夕食を共にしながらお聴きしたお話には、私の知らない時代の地域の姿を垣間見ることができた。テープ起こしをし、「一代記」として仕上げていく過程は、なんだか目頭が熱くなってしまう瞬間もあり、このプロセスを経ることで、住民一人一人、皆それぞれの人生を背負っていることを実感したり、そして話を聴く中で、相手との間に肌で感じることのできる空気感から、「話を聴く」という単純なことがいかに重要なことか、いかに人の心を溶かす力を持っているのかを実感した。おばあちゃんに、心から「ありがとう」と言いたい。

④各々の地元学、そして共有

「好きにやってください」。吉本哲郎先生のこの言葉と今まで受けてきた地元学の講義を頼りに、地元に戻り、約3週間の間に私なりの「地元学」を実践した。一見突き放したような言葉であるが、きっと地元学には「このようにやってください」と言うマニュアルはないのだ。

私は、以前から興味があった「足利の庭園文化」について、そのキーパーソンにお願いし、市内のいくつかの庭園を実際に見て、そこにある歴史や物語を探ることにした。

以前から、足利には立派な庭園が多くあるということは、なんとなく知ってはいたが、実際行ってみるとどうだろう。その魅力と奥深さに時間を忘れてしまった。それぞれの庭には、美しさのほかにその様式になった理由や歴史背景、地形、住民の物語が刻まれている。庭も持ち主である住人にも話を聴くことができ、庭を長く守っていく苦労も知ることができた。

発表先の水俣の地では、宿泊先の宿にて参加者が持ち寄った地元学の成果物に夜な夜な吉本先生や横尾ともみ先生の個別指導が入り、「誰でも一目でわかるように、ここを囲め…ここに張り付けろ…ここを削れ…」と限られた時間の中で各自の成果物をブラッシュアップさせていった。私のパワーポイントは、長い短冊状に模造紙に張り付けることになり、黙々と作業をしたのだが…壁に張り付けてみるとどうだろう。絵地図に比べて無表情だった私のパワーポイントが、生き生きと見えたのだ。

そして迎えた翌日、地元学の成果を5分間で発表するのであるが、不覚にも5分間という時間を有効利用することができず、自分の発見と感動を十分に伝えられなかった自分のふがいなさに悔しい思いをした。しかし、自分の成果や思いを限られた時間でどう要約して伝えるかもトレーニングなのだ。

今回、地元学の一連のプロセスを通じて感じたのは、いかに自分が「知っているつもり」「やっているつもり」だったかということ。地域には、観光パンフレットや役所のホームページなんかには載っていない魅力がまだまだたくさんある。しかし、私たちは役所の固定

観念の中で、よく見もせず仕分けしてしまっている。また、住民との対話も今までママにやってきたつもりであったが、自分の都合のいい場所や人だけに行き、広く声を聴く姿勢はなかったんだと気付いた。

「個性を把握すれば奇跡が起きる」と吉本先生は言っていた。足利の個性ってなんだろう。まだすごく具体的に誰しもを納得させられるような答えをできない情けない自分がいる。しかし、その「奇跡」を信じて、探求して悩みこと「とにかく、やる」ことそこからしか糸口はないんだと思う。